

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

問題作成部会では、この作成方針に基づき、現代の高校生が人間として日常的に直面する倫理的諸課題を具体的な場面と関係づけて、教科書で学ぶ先哲の知見を応用して批判的に吟味する力や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な角度から考察する力を評価できるような問題作成に努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「比喩（たとえ）」をめぐる高校生同士の会話を契機として、哲学や宗教における比喩を手がかりに源流思想分野の知識や原典資料の読解力及び応用力を問い、比喩の役割や意義を考えさせる問題である。哲学や宗教の学習と理解のために不可欠な、多彩な言語表現に対する主体的で開かれた姿勢を促すことをめざした。目新しいテーマであり、原典資料の量がやや多かったため、受験者には一定の冷静さと読み取りのスピードが必要であった。内容は各分野から偏りなく出題されており、全体としては標準的な難易度であった。

問1は、具体的な比喩の例を手がかりに、古代の思想・宗教に関する知識を問う設問である。基本的な内容ではあるが、選択肢の語句を正確に読み取ることが必要となるため、やや難易度が高い。問2は、言葉に関わる活動という観点から、古代ギリシャにおけるソフィストとソクラテスの活動に関する知識を問う。ソフィストとソクラテスの思想についての基礎的な理解があれば解答できる。問3は、イスラームに関する知識に加えて、原典資料を読み解く力を問う設問である。資料は人名が多く、読み慣れないかもしれないが、内容は理解しやすい。イスラームの信仰に関する基礎的な理解と読解によって解答できる標準的な設問である。問4では、老子、ユダヤ教、イスラーム、仏教における言葉の役割についての知識を問う。基礎的な理解で解答可能であるが、正しい選択肢を全て選ぶ形式で難問となった可能性があり、問題形式については改良の余地がある。問5は、資料を説明する会話の中で、ユダヤ・キリスト教の基本的な理解を問う設問である。それ自体では意味を取りにくい資料であるが、会話で十分に情報を補っているため、難易度としてはやや平易であった。問6では、資料を適切に読み取り、教科書知識と結び付ける応用力が問われる。二つの資料に同じ「無用」という語が含まれているが、莊子思想を正しく理解していれば解答できる。問7では、仏教とキリスト教を対比させながら、基本的な知識に基づいた資料の読解力を問う。特にbについて、二つの資料と選択肢を丁寧に読む必要があるが、難易度は標準的である。問8は、大問のテーマに関する教科書知識とともに、会話文から全体の趣旨を問う設問である。ギリシャ哲学と仏教に関する知識については、記述がやや細かいため、正誤判定のポイントを見極めるのが容易ではなかった可能性がある。趣旨に関しては読み取りやすく、全体としては標準的な設問である。

第2問 全体を貫くテーマは、日本思想において古代から現代まで論じられてきた、「人間と自然の相関の中で生みだされる秩序」である。高校生二人が自身の興味関心をきっかけに、図書館での調べ学習や読書会を行う学習場面を設定し、倫理の基礎知識に加えて、このテーマについて倫理的な見方・考え方を働かせながら理解を深めさせることをめざした。学習場面の設定については、他の大問と並んで、「「倫理」で求められる本質的な学習活動」であり、「高等学校等における授業改善に資する問題作成」とであると評価された。

問1は、江戸時代の儒学者についての基本的な知識を問う問題である。正答の新井白石について「教科書の範囲を超えて」との指摘があったが、これは教科書にも十分に記述がある。「倫理」の学習においては、単に人物と項目を結びつけて覚えるのではなく、時代状況や、思想・著作の内容に習熟することを求めたい。問2は、日本の伝統的な自然観・世界観について問う問題で、基本的な出題との評価を受けた。問3は、日蓮の思想や活動についての基本的な知識・理解を問うた。これもごく基礎的な内容の出題であったが、正しい記述を正しいと判断しきれていない傾向が見受けられた。消去法で解くのではなく、基礎的な内容について正答をきちんと選べるだけの学習を求めたい。問4は、資料『二宮翁夜話』と二宮尊徳についての基礎知識を組み合わせ、天道と人道の関係を捉える思考力を問うもので、「平易ながら良問」と評価された。問5は、日本の美意識に関する基本的な知識をもとに、具体的な絵画資料（雪舟「破墨山水図」）の特徴を読み取ることを通じて、学習内容を応用する力を問うた。「絵画鑑賞に即して解けてしまう」との評価を受けたが、文化や美に関する学習内容については、単に言葉で知っているだけでは不十分で、実際の作品と結び付けて初めて十分な理解と言える。そうした理解ができていないかを問うことが出題意図であった。絵画や写真を用いた出題は、問題作成の労苦が大きい、今後更に工夫して出題していくことが望ましい。問6は内村鑑三についての、問7は河上肇と吉野作造についての、知識・理解を問うた。いずれも「平易」との評価を受け、作問部会としても基本的な知識を問う問題と考えている。日本近代思想の分野について、十分な学習がなされることを期待する。問8は、資料（中井正一『美学入門』）から「秩序」についての捉え方を読み取る力とともに、資料内容と高校生2人の捉え方との関係を検討する、論理的な思考力を問うた。「資料を注意深く読めば、趣旨を踏まえていなくても簡単に解答できてしまう」との評価もあったが、公民科「倫理」で扱うような高度に抽象的な文章については、その趣旨を理解するために、一文一文を注意深く読み、その内容を論理的に整理していく力が求められる。そうした学習が高等学校の現場でも行われることを期待しての出題であった。やや平易な問題であったが、出題の意図は一定程度達成されたと考えている。

第3問 学習指導要領に掲げられた「他者と共に生きる主体としての自己」という理念に着目し、「他者との対話」と「主体性」を主題として設定した。「主体」と「対話」はともに、哲学史の中で、理論・実践の両面から探究されてきた概念である。このことを踏まえ、「他者と共に生きる主体」の理念を実現していく高校生の学びのプロセスは、知識の習得にとどまらず、対話による共同探究の活動を介した主体の態度変容といった実践的あり方にもつながることを考えてもらうことを目指した。その際、高校生が「主体とは何か」について疑問をもち、それに関する他者との対話を通じて新たな考え方や態度を獲得していく構成をとったが、この点については「探究型授業や主体的な学びの実践を求めるメッセージ」と肯定的な評価を受けた。全体の難易度はやや高いとの指摘もあった。

問1は、ベーコンの4つのイドラに関する知識を日常生活の場面に適用して考える能力を

問う事例問題である。4つのイドラは各々の名称と意味を対応させて終わりになりがちなので、身近な具体例にまで踏み込んで理解してほしい。問2は、実存としての主体に注目したキルケゴールについての知識問題である。メルロ＝ポンティについての教科書記述である誤答選択肢に「自己の実存」という文言が入っていることで選択した人が一定数いるのではないかと推測している。問3は、アドルノとホルクハイマーの思想についての知識問題である。各選択肢の選択の割合を見ると、彼らの中心思想である「啓蒙の弁証法」について記述された説明の正誤判断に迷った形跡がある。問4は、パースの資料と、それに影響を受けた「子どものための哲学」の資料の読解問題である。プラグマティズムと哲学教育の結びつきは密接であるため、この二つの資料を組み合わせで出題できたことには意義があると考えているが、選択肢が平易との指摘があった。特にパースの読解問題が二択ゆえに平易になったのは、引用できる資料の分量が限られていたことにも起因する。1ページに2つの資料と会話文を収めようとした結果、資料の分量が減り、選択肢を適切な内容と分量で作るためのリソースが不足した憾みがある。問5は、デカルトの思想についての知識問題。正答選択肢だけが評伝的内容となっているとの指摘を受けた。出題者としては、デカルトの認識論だけではなく、旧来の学問の閉鎖性や因習を脱却して世界へ踏み出す学知を打ち立てようとした彼の哲学史的位置づけも理解してもらいたいと考えた。問6は、討論と会話と対話の違いについて論じたフロムの資料『所有か存在か』の読解問題。フロムの思想についての知識を問う選択肢の前半部分と、後半の読解問題に内容的なつながりが出るよう工夫した。「対話について受験者の理解が更に深まるよう資料が精選されている良問」との評価を受けた。問7は、ヘーゲルが説いた絶対精神についての知識問題である。難問ではない。絶対精神の概念がもつ歴史的スケールが、日常的な社会生活を念頭に置いた「主体」や「対話」という大問全体のコンセプトからするとやや唐突に感じられたかもしれない。問8は、哲学対話を経験した生徒が交わった会話、及びその経験を振り返り、その意義を述べた文章を読み、対話を通じて実現する共同的な主体性とはどのようなものかを問う。「大問全体の趣旨にふさわしい良問」との評価を受けた。出題者としては、「他者と共に生きる主体」となることは、学ぶべき内容ではなく、自発的な行為なのだという点を強調したいため、授業で与えられる哲学対話で終わるのではなく、それに学んだ高校生が自主的に哲学対話の会を企画するという場面設定にこだわった。

第4問 大問を通じてのテーマは、行為や制度の道徳的な是非に関する判断の基準と、行為者や制度の意図の内容との関係である。同じように悪い結果を招くと予想できる行為であっても、その結果が意図されていたかどうかによって、行為に対する道徳的な評価は変わってくるとする見方がある。この見方について、資源の無駄遣いのような日常的ケースから、積極的差別是正措置や尊厳死の是非といった社会問題まで、幾つかの具体的事例に即して理解し、考えてもらうことを趣旨とした。以上の趣旨ととくに関係が深いのは、問7、問8、問9である。また、その他の問題も含めて、環境倫理、国際化と多文化共生、生命倫理、現代思想、青年期の心理の課題の分野からバランスよく出題するようにした。

問1と問6は青年期の心理に関する出題である。それぞれ心理的適応、性格（類型論と特性論）についての教科書知識を問う問題である。外部評価で指摘されたように、類型論と特性論に関する教科書記述は内容の似た記述が多く、知識が混同しやすくなるためと思われる。問7も心理に関する問題である。行為の意図と結果が悪かったり悪くなかったりする場合には人々がそれぞれの行為の道徳性についてどのように評価するかを調べた心理学の実験を資料

として用いた。大問の趣旨との関わりが非常に高い問いであるが、作問段階から、扱う実験の内容や「テロリスト」という表現を使うことの妥当性について疑問が出ていた問題でもある。外部評価でもこの点は慎重であるべきだと指摘があった。問2、問3、問4はそれぞれ環境倫理、多文化共生、生命倫理に関する問題である。問2は、作問段階では、環境倫理に関する教科書記述が少なめで、過去問題との重複を避けつつ難易度を上げることが困難なように感じていたが、点検から繰り返し容易すぎると指摘されたのを受けて、最終的に組合わせ問題にしたのが功を奏したのかもしれない。問3は、サイードのオリエンタリズムの概念と合致しない例を見つけさせる問題で、単なる知識よりも深い理解を問う意図があった（その点に工夫がみられると評価いただいた）。問4は、終末期医療の倫理に関する教科書知識を問う問題で、平易ながら重要な問いだと評価をいただいた。問8と問9は、大問の趣旨に沿った設問とした。問8は教科書には出てこない思想家（アンスコム）の資料を提示して、意図や道徳について述べた選択肢の正誤を組み合わせで答えさせる問題である。選択肢の文章は、資料の文章の言い換えというよりは、資料の文章から論理的に導ける内容になるように工夫して作問したつもりだったが、外部評価からは資料から選択肢の内容を読み取るのは難しいのではないかと指摘があった。問9はリード文ⅠとⅡの両方の内容を理解したうえで、そこから論理的に導ける内容の文章を選ばせる設問である。大問の全体を通して設問の趣旨について思索を深めさせる良問だと評価していただいた。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教科担当教員からは、設問数や分量は「適切」であり、難易度も「適切」だとコメントいただいた。また、「ほとんどの大問・小問が高校生の間の会話文を基点とし、そこから原典資料の読み取りや読書会、さらには哲学対話へと活動が広がる構成となっており、「倫理」で求められる本質的な学習活動を幅広く登場させた設定といえる」との評価をいただいた。

教育研究団体からは、「高等学校で習得する知識・技能と習得した知識・技能を用いて思考力・判断力を働かせて問題を解いていくことをとおして、これから大学で学ぼうとする高校生が身に付けるべきものの見方や考え方を示して」おり、「難易度も標準的である」と評価いただいた。

全体として、試験問題の内容・範囲、試験問題の分量・程度、試験問題の表現・形式等について妥当と評価いただいたことは、適正な問題の作成ができたものとして肯定的に自己評価したい。ただし資料の量や使用の仕方については、さらなる工夫を求めるいくつかのご指摘があったので、改善に努めたい。

4 ま と め

高等学校教科担当教員から、「授業者や受験者に探究型授業や主体的な学びの実践を求めるメッセージが読み取れ、高等学校等における授業改善に資する問題作成であった」という評価を得たのは、出題者の意欲を喚起するものとなっている。学力を測る試験としての安定性を確保すると同時に、高等学校の教育現場の授業改善に結びつく出題を今後も心掛けていきたい。

基本的な知識の確認、思考力・判断力・表現力等を問うこと、高校生の学びの指針となるだけでなく高校生へのメッセージとなること、教育現場における改善に資するような資料を活用することなどの課題をさらに充実できるように取り組んでいきたい。